

近世長崎の瓦について

伊藤 敬太郎

2017年9月

第66回 埋蔵文化財研究集会

『幕藩体制下の瓦 ー近世都市遺跡における生産と流通ー 』

近世長崎の瓦について

伊藤敬太郎（国際文化財株式会社）

1 はじめに

近世長崎の瓦は、2002～2004年に調査された長崎奉行所（立山役所）跡の出土瓦について4期の編年を示した（伊藤・安村2004、安村2005）。2008年には、山崎信二氏が長崎市内の遺跡や、県下の原城跡、日野江城跡、森岳城跡、玖島城跡などの資料をもとに、6期の編年を示された（山崎2008）。その後、調査事例が大幅に増えたわけではないが、2010・2011年には原城跡、日野江城跡の総括的な報告書が刊行され、出土瓦についても網羅的な提示がなされている（南島原市2010・2011）。

本報告では、山崎編年の再論になる箇所も多いが、新資料をもとに若干の検討を行うとともに、山崎氏が示されなかったⅦ期以降、特に軒棧瓦の様相についても言及してみたい。なお、区分や年代は、山崎編年に従う。

2 Ⅲ-1期（1592-1600）

日野江城、原城の瓦をあげることができる。島原半島の南西部に位置する両城は、中世から続く有馬氏の居城である。近世城郭としては、日野江城が先行し、支城あるいは移転先として原城が築城された。日野江城が改造された詳しい時期は不明だが、名護屋城の普請が落ち着いた頃（17世紀末葉）、原城は、イエズス会の記録から1599（慶長4）年に着手され1604（慶長9）年に完成したとされる（川口2015）。その後、1615（元和元）年の一国一城令により両城は廃城となり森岳城が築城される。

A 日野江城跡（南島原市）

軒丸瓦1種、軒平瓦2種がある。軒丸瓦は、左巻きの三巴文でコビキAである（第1図1）。軒平瓦は、上向きの三葉文で唐草は連続する（第1図2）。もう1種は、下向きの三葉文で小破片が1点のみ出土している。これらは原城の軒丸瓦（Ⅱa1類）、軒平瓦（Ⅱa類、Ⅰb類：第1図9）と同範である。丸瓦は、コビキAが主体であるが、コビキBも若干量認められる。コビキBの丸瓦は、下向き三葉文軒平瓦に伴うと考えられており、原城築城時に日野江城から補足的にもたらされた可能性がある。

B 原城跡（南島原市）

軒丸瓦は、巴が右巻きと左巻きの2タイプがあり、右巻き（Ⅰ類）は3種、左巻き（Ⅱ類）は5種に分類されている。いずれも珠文があるがⅡd類（第1図5）のみ珠文がない。その他、花十字文軒丸瓦がある。図版は、瓦当文様が良好な資料を提示した（第1図4：Ⅱc類、6：Ⅱe類、7：Ⅱe3類）。技法はⅠb類（第1図3）がコビキAの他は、すべてBである。

軒平瓦は、Ⅰ～Ⅶ類に枝番があり、改範の可能性のあるものを含めて13種に分類されている。Ⅰa類（第1図8）の中心飾は、上向きの複線三葉文である。葉内は肉太線で三葉を表現する。基部には縦線が3条ある。唐草の1・2反転目の下部に珠点があり、向かって左側の1反転目の下部には「大」字の文様が表出される。Ⅰb類（第1図9）は、Ⅰa類を上下に反転させたもの。「大」字は認められない。Ⅰb'類（第2図1）は下向きの三葉文であるが、複線は、あまり表出されていない。唐草はⅠb類と同じ配置で、珠点もあるが、全体に小さい。総じて文様の掘り込みが浅く、不鮮明である。Ⅱb類（第2図2）は下向き三葉文で、唐草は、上向きの唐草が2単位配置される。名護屋城

(I-12Ba)と同文である。Ⅲa2類(第2図3)は中心が肉太線状、両脇は複線の上向き三葉文である。Ⅲb類(第2図4)は、下向きの複線三葉文である。Ⅳ類(第2図5)は、他類とはまったく異なる文様である。Ⅴ類(第2図6)は宝珠文で、唐草は4反転する。名護屋城(Ⅲ-3D)と同範の可能性はある。Ⅵ類(第2図9)は、三葉文の先端が菱状になる。Ⅶ類(第2図7・8)は、中心飾の両脇に葉脈を表現した葉を配する。

出土点数は、多い順に、軒丸瓦ではⅡc類(49点30.8%)、Ⅱe3類(45点28.3%)、Ⅱe2・Ⅱd類(各13点8.2%)、軒平瓦はⅠb'類(46点32.4%)、Ⅰb類(37点26.1%)、Ⅰa類(16点11.3%)である。これらの瓦が、全体の約7割を占める。原城の主要な瓦は、コビキBであることから、コビキAからBへの移行は原城築城時に行われたと考えられる。なお、コビキBの出現について山崎氏は「原城軒平瓦のコビキBの段階の上限は、軒平瓦C種(Ⅰa類)が後述(Ⅲ-2期)の玖島城の軒平瓦の文様より先行した形態をもつことから、1600年以前としてよいであろう。ただ原城軒平瓦D種(Ⅰb類)は1600年をやや過ぎた頃のものである可能性は残っている」(カッコ内著者補注)としている。

なお、文様や技法の系譜は、名護屋城と同文や同範の瓦もあるが、少数派であり、日野江城を含めて主要瓦の系譜関係は不明である。

3 Ⅲ-2期(1600~1615)

A 万才町遺跡(長崎市)

大村町(万才町遺跡)は、1571(元亀2)年、最初に町建てされた六町のひとつである。良好な一括資料として1601~1610年代に破棄されたSK128の資料がある。

第2図10は橘文である。ハナレ砂の付着が顕著で、裏面は外周に沿ったナデがある。名島城(福岡市)と同範である。第2図11は、左巻きの三巴文で、尾部の先端は接する。第2図12は輪宝文で、裏面は外周に沿ったナデがある。第2図13は、花十字文である。圏線がある唯一の資料である。第2図14は、上向き三葉文で、唐草1反転目の下に珠点がある。技法は、確認できるものすべてコビキBである。

B 勝山町遺跡(長崎市)

サント・ドミンゴ教会跡である。1609(慶長14)年頃に建てられ、1614(慶長19)年には破壊されている。3種の花十字文軒丸瓦と1種の軒平瓦が教会の瓦として用いられた(第3図1~4)。全長が短いのが特徴で軒丸瓦は24cm、軒平瓦は22.8cmである。花十字文軒丸瓦は、宮下雅史氏や山崎氏によって花卉の形状や花卉間の珠文の数により分類がなされている(山崎2015)。なお、軒平瓦は、出島乙名部屋跡(第3図5)でも同文の瓦が出土している。

C 長崎奉行所(立山役所)跡

長崎歴史文化博物館建設に伴う2002~2004年の調査で、3面の遺構面が確認された。丘陵斜面を平らに均すため幾度も整地されており、そこから出土した豊富な陶磁器類や文献史料をもとに、遺構の変遷はⅤ期に区分されている。年代の特定できる時期は、17世紀初頭:「山のサンタマリア」教会(奉行所Ⅰ-2期)→慶安元(1648)年:井上筑後守屋敷(奉行所Ⅱ期)→1673(延宝元)年:長崎奉行所立山役所設立(奉行所Ⅲ期)→1717(享保2)年:奉行所の造成・建替(奉行所Ⅳ期)である。

当該期の瓦は、花十字文軒丸瓦の他に、軒平瓦では第3図6がある。奉行所編年Ⅰ-1(中世?)としたNH142Aであるが、沖城出土(第3図11)と同範であるため、山崎氏の指摘のとおり、当該期に位置づけられる。

D 沖城跡（諫早市）

西郷氏の支城であったが、1587（天正15）年には竜造寺氏の支配に代わっている。17世紀初頭の瓦として軒丸瓦2種と軒平瓦3種がある。軒丸瓦は、ともに左巻きの三巴文で、尾部の先端がつながり圏線状になる（第4図7・8）。軒平瓦の第4図9は、唐草1反転目の先端に珠点を配する。万才町遺跡SK128とは同文である。第4図10は、中心飾は不明だが上向きの唐草が3反転する。第4図11は、上向きの三葉文で長崎奉行所NH142Aと同範である。

E 玖島城跡（大村市）

大村喜前により慶長4（1599）年に築造され、慶長19（1614）年大村純頼により改築されている。当該期の瓦は山崎氏により軒丸瓦2種、軒平瓦1種が提示されている。軒丸瓦は、巴文の中心付近に「大」字がある（第4図1・2）。軒平瓦は、上向きの複線三葉唐草文で、原城と似るが退化した傾向を示す。唐草の1・2反転目の先に珠点を配する（第4図3・4）。また、中心飾の向かって左に「大」字、右に「キ」字状の文様が表出される。これについて山崎氏は「大」と「主」と読み大主耶蘇や大主教との関係を指摘されている（山崎2015）。もちろん「主」と断定されている訳ではないが、「大」字を表出する瓦はキリシタン大名時代の有馬氏や大村氏の居城から出土していることと関連してその意味について今後も慎重に検討していく必要がある。

4 IV-1期（1615～1637）

森岳城跡（島原市）

松倉重政により元和4（1618）年～寛永元（1624）年に築城された。創建期の瓦として、山崎氏は、軒平瓦6種を上げている。中心飾がはっきり分かる2点を図示した。第4図5は複線の一葉文である。第4図6は上向きの三葉文である。唐草2反転目の先に珠点を配する。技法は、いずれも瓦当面にハナレ砂があり、平瓦部凹面に木目痕を残す。

5 IV-2期（1637～1657）

長崎奉行所（立山役所）跡・万才町遺跡

当該期にあたる井上筑後守屋敷に伴う瓦として、複線三葉文の軒平瓦がある（第4図7）。万才町遺跡では、寛文3（1663）年の大火に伴う火災整理土坑（SK35）から複線三葉文で葉内に縦線を配する軒平瓦が出土している（第4図8）。2種ともにハナレ砂が認められ、唐草は中心飾から派生している。

6 V期（1657～1682）

1673（延宝元）年に長崎奉行所立山役所が設置される。創建期に使用された瓦は、長崎を代表する瓦とも言える上向き複線三葉文軒平瓦がある。葉内には縦線があり、基部には珠点を3点配する。奉行所では、型式番号をNH111として設定しており、A～Gの7種が確認できる。技法は、D種の凹面に木目痕がわずかに残るが、他では認められず瓦当面のキラコが目立つ（第4図11：NH111A、第5図1：B、第5図2：C、第4図12：D）。

文様の存続期間が長く、1688（元禄元）年に設置された小瀬戸番所（第5図6）や、1731（享保16）年創建の崇福寺護摩堂（第5図7）でも使用されるため、山崎氏はVI期に位置づけているが、出現は立山役所の設置までさかのぼるため上限をV期に位置づけた。出土点数の多いA種や技法が古いD種は、この時期で良いと考えるが、他はVI期に下る可能性もある。

また、奉行所の創建にあたっては、破却された天草富岡城の瓦（第4図14）が持ち込まれており、第4図13（NH 222 A）は、それを模し奉行所で創出された瓦であると考えられる。

これらに伴う軒丸瓦として、軒平瓦の出土点数や位置から、NM 311 A（第4図9）・BがNH 111 Aに、NM 241 A（第4図10）がNH 222 Aに伴うと考えられる。NM 311 A、NM 241 Aではハナレ砂、NM 311 Bではキラコが認められる。その他、長崎奉行所の第5図3、第5図4や、万才町遺跡の第5図5も当該期にあたる考えられる。いずれもハナレ砂が認められる。

V期では、技法的にハナレ砂とキラコが併存しており、軒平瓦凹面の木目痕もわずかに認められるものがある。VI期以降では、キラコが目立ち、木目痕も丁寧に消されることから、V期が技法の転換点にあたる考えられる。

なお、長崎奉行所は、立山役所の他に、外浦町（現江戸町）に西役所が設置されていた。こちらは、寛文3（1663）年の寛文大火や、延宝6（1678）年、元禄11（1698）年の火災により被災している。現在は、長崎県庁が位置するが、今後移転が予定される。その後、実施されるであろう発掘調査により、被災との関係で瓦を位置づけることができれば、当該期の様相について、より明らかにできる可能性がある。

7 VI期（1682～1724）

V期で取り上げた複線三葉文軒平瓦（奉行所NH 111）は、小瀬戸番所や、崇福寺だけでなく興善町遺跡、出島など長崎市内の各遺跡で出土する。役所だけでなく市中にも流通した一般的な瓦であった。一方、奉行所NH 222 A（第4図13）は、奉行所以外では流通していないようである。富岡城からの搬入瓦の捕捉として使用されたが、それ以上の利用はなかったと考えられる。

その他、興善町遺跡で、大坂式軒平瓦が出土している（第5図8）。類似した文様は臼杵市大橋寺で認められる（山崎 2008 第49図15）。

8 VII・VIII期（1724～1765・1765～1800）

棧瓦出現期を物語る資料には恵まれない。唐人屋敷では、1号カラ堀から、18世紀前葉～中葉の陶磁器とともに第5図9が出土している。現状では、もっとも古く位置づけられる資料である。

長崎奉行所では、宝暦5（1755）年に開削され、18世紀末に埋め戻されたSD 1から、第5図10～13（13は軒平瓦の可能性あり）、SK 2からは第5図14が出土している。角の隅切は確認できるものすべて1回切りである。奉行所III期では棧瓦は出土しておらず、1717（享保2）年の大改作以降（奉行所IV期）に棧瓦が出現する。また『長崎志正編』1744（延享元）年に「立山御役所瓦葺ト成ル」とあり、奉行所における棧瓦採用との関係で注目すべき記事である。

玖島城では、1818（文政元）年に家臣館から普請役所へと改築した際に長与三彩と共に廃棄された可能性がある鎌形の軒棧瓦（第5図15）が出土している。

これら出土資料の文様を並べてみると長崎では、江戸や大坂とは異なりV期に出現した複線三葉文がそのまま軒棧瓦の文様として主流にならなかったことが指摘できる。その理由について、見解を持ち合わせていないが、生産地（瓦師）の状況を含め、今後解明すべき重要な課題である。

9 終わりに

山崎氏が課題とした瓦師の系譜などには言及できなかった。その手掛かりとなる生産地の状況も、はっきりとしない。

藤原学氏は、幕末から明治初期の長崎におけるレンガ生産を調査する中で、長崎湾岸の深堀（長崎市深堀町）周辺に所在した瓦師がレンガ生産に携わった可能性を指摘されている。また、大村藩内の全村を悉皆調査した『大村郷村記』（文久2（1862）年完成）によれば長与村「瓦焼之事」として、「富所において瓦を焼始めしは、領内戸町村百姓彌兵衛と云者、同所に於て数年瓦を焼て産業としけるか、延宝五巳年、此村に來りて焼ける」とある。延宝5（1677）年以前に戸町村で瓦が焼かれていたことが分かる。戸町村は、深堀と同じく長崎湾の南岸に位置するが5kmほど長崎市街寄り、現在の長崎市戸町にあたる。残念ながら戸町や深堀で瓦窯の調査がなされたことはない。今後、ひとつでも調査が実施できれば多様な文様と瓦師の関係解明に向けての第一歩となる。

最後に、瓦屋根がもたらす都市景観の一端について触れてみたい。天領長崎では、19世紀前葉の川原慶賀『長崎港図』では、多くの屋敷が瓦葺で描かれている。これは18世紀中葉～後葉に普及した棧瓦の影響が大きいと考えられる。

一方、地方はどうであろうか。『大村郷村記』によれば安政3（1856）年時点において、全67ヶ村の内、13村23軒の瓦屋が記載されている。うち、15軒は、波佐見焼の中心地である波佐見村とその周辺に集中しているが、他は領内に散在している。瓦屋が所在する村を確認してみると、比較的戸数の多い村に認められ離島にも瓦屋1軒がある。また、郷村記「寺社之事」によれば離島の神社の多くが「瓦宇」であることが確認できる。ただし、本土部においても「茅宇」、「菅宇」の寺社が散在するため、この時期、ほとんどの寺社が瓦葺であったとは言えない。幕末期の長崎では人口の多い農村に瓦屋があり、瓦葺屋根が地方にも広まりだした時期と言えよう。残念ながらこれらの瓦屋と実際に焼かれた瓦・葺かれた瓦の関係は追及できていない。多様な瓦当文様を手掛かりに、その広がり把握することができれば、天領長崎の他、大村藩、島原藩など複雑に分かれていた近世長崎における流通形態について瓦をもとに言及できる可能性を秘めている。

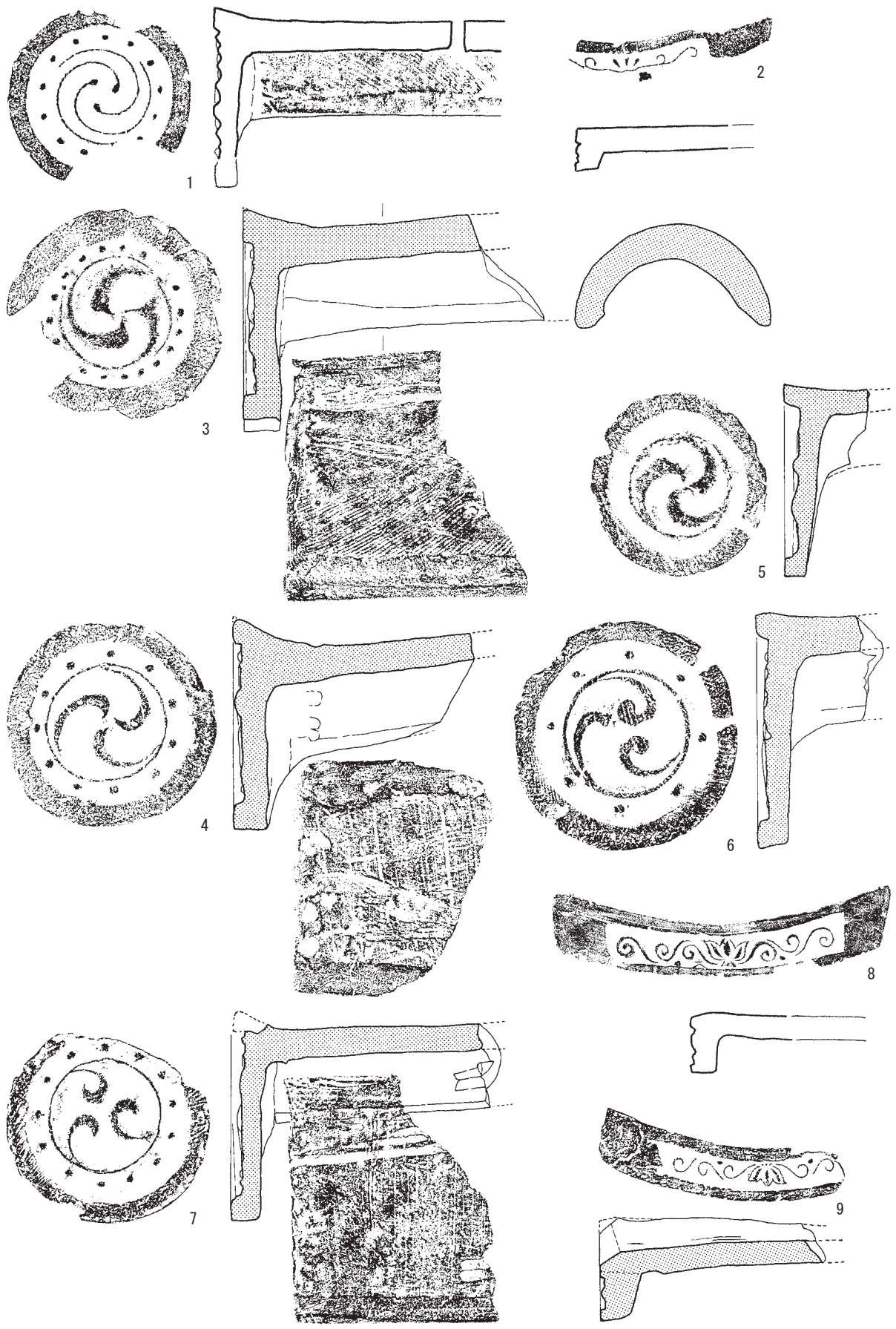
長崎県埋蔵文化財センターが所蔵する万才町遺跡、長崎奉行所（立山役所）跡、沖城跡、玖島城跡の資料観察については、長崎県教育委員会の配慮を得た。

また、本報告にあたっては、以下の皆様から助言を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

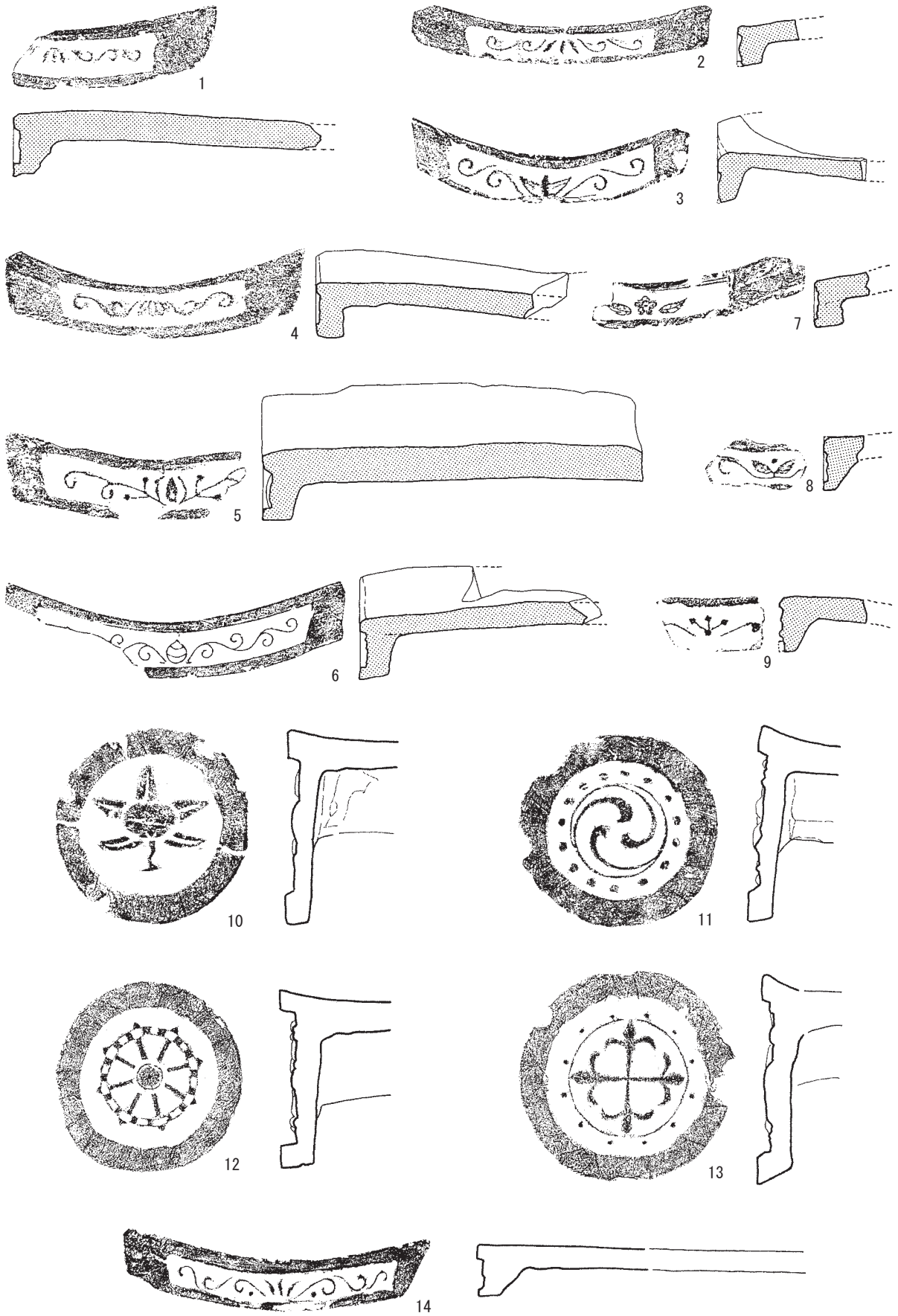
田中学、田中垂貴子、寺田正剛、古門雅高、宮下雅史、宮木貴史、山口美由紀（敬称略）

引用・参考文献

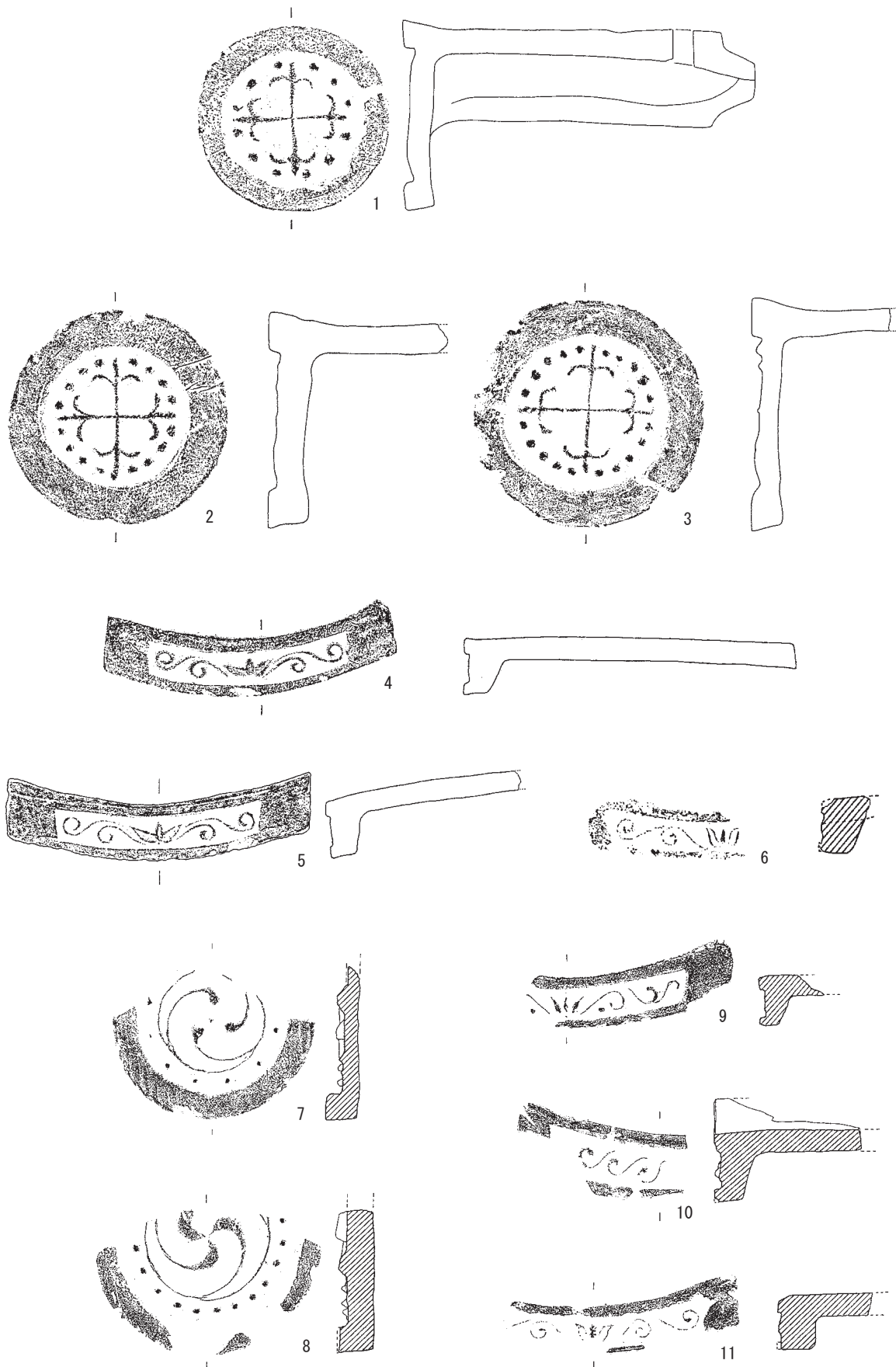
- 山崎 2008 や奉行所報告書で取り上げなかった文献のみを記載する。
藤原保編 1982 『大村郷村記』第1～6巻 国書刊行会
藤原学 2001 『達磨窯の研究』学生社
長崎市教育委員会 2001 『唐人屋敷跡』
長崎市教育委員会 2003 『勝山町遺跡』
伊藤敬太郎・安村建 2004 「長崎奉行所跡の瓦について」『長崎奉行所（立山役所）跡・炉粕町遺跡』
安村健 2005 「長崎奉行所跡の瓦について」『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』
山崎信二 2008 「近世長崎の瓦」『近世瓦の研究』
長崎市教育委員会 2008 『国指定史跡出島和蘭商館跡 第1分冊』
南島原市教育委員会 2010 『原城跡Ⅲ』
長崎市教育委員会 2011 『興善町遺跡』
南島原市教育委員会 2011 『日野江城跡 総集編1』
川口洋平 2015 「南蛮屏風に描かれた瓦」『高野晋司氏追悼論文集』
山崎信二 2015 『長崎キリシタン史 附考キリスト教会の瓦』雄山閣
図版出版 山崎 2008 および各報告書から転載した。



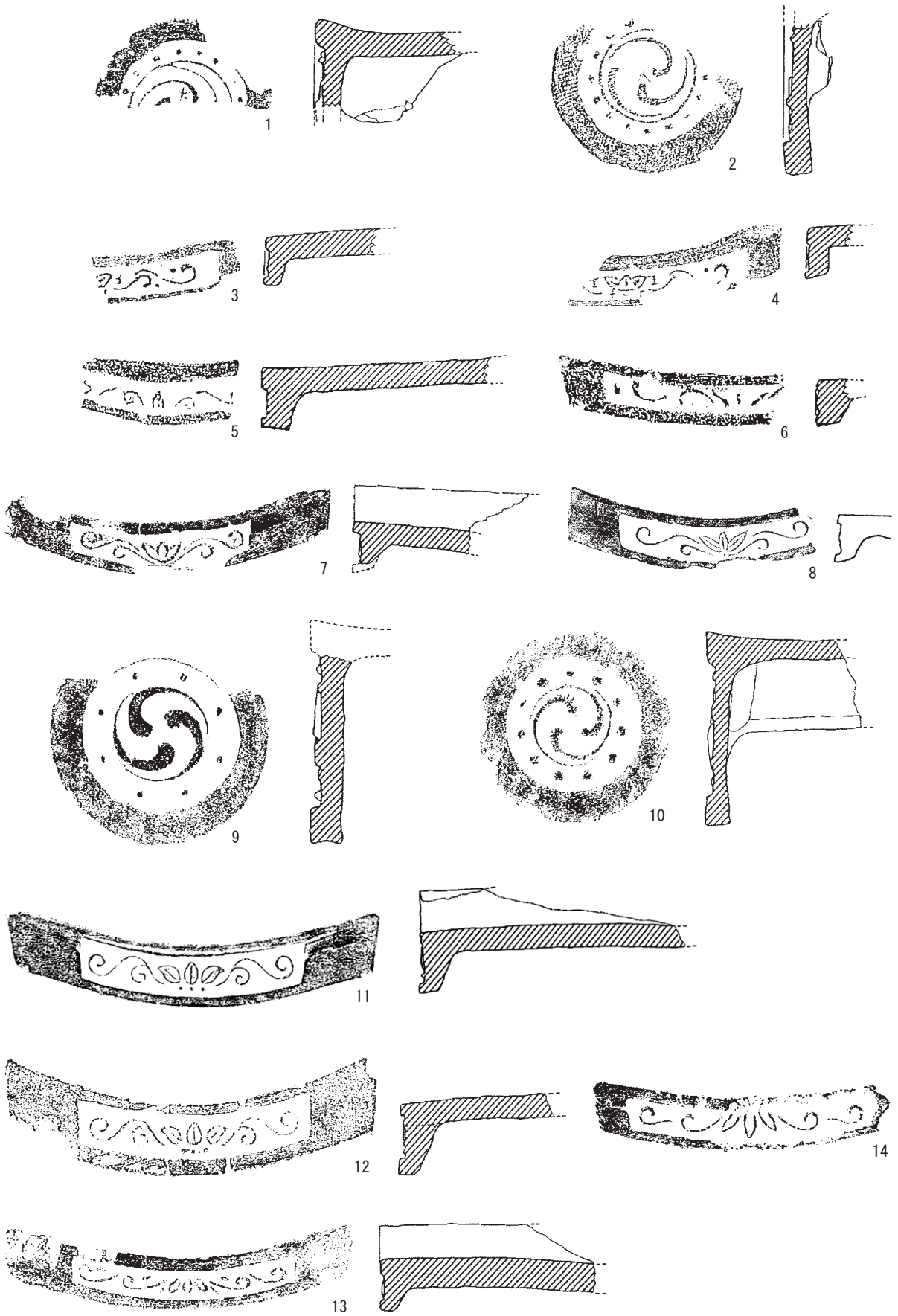
第1図 日野江城跡・原城跡の瓦 (1/4)
 1・2：日野江城跡、3～9：原城跡



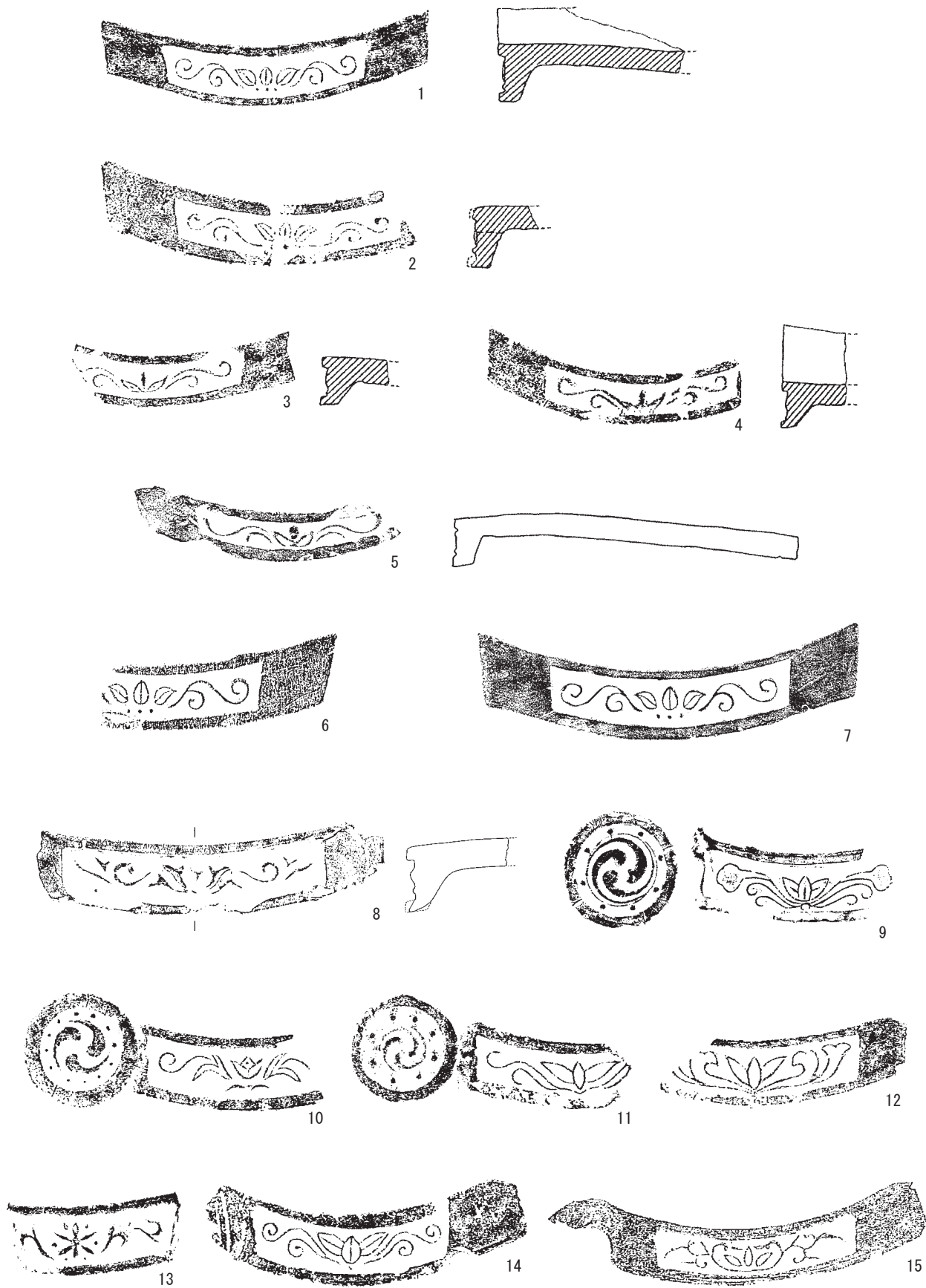
第2図 原城跡・万才町遺跡の瓦 (1/4)
 1~9 : 原城跡、10~14 : 万才町遺跡



第3図 勝山町遺跡・長崎奉行所（立山役所）跡・沖城跡の瓦（1/4）
 1～4：勝山町遺跡、5：出島、6：長崎奉行所跡、7～11：沖城跡



第4図 玖島城跡・森岳城跡・長崎奉行所（立山役所）跡・万才町遺跡・天草富岡城跡の瓦（1/4）
 1～4：玖島城跡、5・6：森岳城跡、7・9～13：長崎奉行所跡、8：万才町遺跡、14：天草富岡城跡



第5図 長崎奉行所（立山役所）跡などの瓦（1/4）

1～4・10～14：長崎奉行所跡、5：万才町遺跡、6：小瀬戸番所、7：崇福寺、8：興善町遺跡
 9：唐人屋敷跡、15：玖島城跡